

平成20年度「専修学校教育重点支援プラン」成果報告書

事業名	顎顔面補綴技術のための教育プログラムの開発		
法人名	学校法人吉田学園		
学校名	吉田学園医療歯科専門学校		
代表者	理事長 吉田 松雄	担当者 連絡先	理事長秘書室 室長 菊池 徳雄 011-272-6070

1. 事業の概要

顎顔面補綴とは、口腔癌などの腫瘍や事故による外傷、炎症、奇型などにより生じた顔面や顎骨などの欠損部を人工物で修復し、失われた機能と形態の回復をはかるというものである。
 現在顔面補綴物の製作においては国家資格などによる規定はなく、歯科口腔外科や形成外科が中心となって研究しており、それに伴い一部の歯科技工士や義肢装具士などが製作しているのが現状である。
 そのような状況の中で特に教育として顎顔面補綴を取り入れている専門学校はごくわずかと限られており、体系化された知識や技術の習得を目指したカリキュラムも具現化されていない。
 また、この分野においては、患者の心のケアともいえるリハビリとしてのメイク・美容にかかわる部分への取り組みも必要である。
 このような現状において、医療歯科専門学校が美容系専門学校とも協力しながら、現状調査を実施して、顎顔面補綴の知識・技術教育を有効に行うための教育プログラムや教材の開発を行った。

2. 事業の評価に関する項目

① 目的・重点事項の達成状況

■ 開発①

事業計画の立案当初、この分野を習得するためには解剖学(骨格・筋肉・皮膚関係で約10時間)、材料学(造形材料、色彩関係で約200時間)、製作実習(約300時間)、リハビリメイク(約100時間)の合計900時間程度が必要であると考え、その第1ステップとして眼窩エピテーゼを中心に開発を行なうこととした。しかし、開発を進めていく段階で、コミュニケーション分野、衛生分野についても必要であると考え、これらを追加して、「教育プログラム(カリキュラムおよびシラバス)」を作成した。

■ 開発②

川島整形外科病院・清水正嗣先生、愛知学院大学歯学部補綴第一講座・田中貴信教授、尾澤昌悟准教授、愛知医科大学歯科口腔外科・森下裕司先生、秋田大学附属病院歯科口腔外科・田中清志先生、久留米大学医学部附属病院歯科口腔医療センター・陶山日出美先生、横浜市立大学附属病院歯科口腔外科・早川浩生先生、山形大学医学部附属病院歯科口腔外科・里見孝先生、金沢医科大学歯科口腔科・庄野紀代美先生、佐賀大学医学部歯科口腔外科・山口能正先生、長崎大学医学部歯学部附属病院中央技工室・永野清司先生、京都大学附属病院口腔外科・高木朗先生、奈良県立医科大学附属病院口腔外科技工室・畠中利英先生、東洋医療専門学校歯科技工士科・杉田順弘先生、福岡大学病院歯科口腔外科技工室・榎英明先生、愛知学院大学歯学部附属病院歯科技工部・岡田通夫先生、日本歯大病院・長谷部俊一先生、フォーティーフォーカースクール学長・阿部弘先生に執筆協力をいただき、日本口腔顎顔面技工研究会会長・関三千男先生には執筆・監修、日本大学歯学部附属専門学校・鈴木弥佐士先生には編集でご尽力いただき、「口腔顎顔面技工テキスト」「口腔顎顔面技工実習帳」を作成することができた。
 「ここまで充実した口腔顎顔面の教材は今までになかった」と、配布先から追加の依頼が来ている。改善点はあるが、教材開発としては大きな成果を収めることができた。

■調査

株式会社札幌デンタルラボラトリーの協力を得て、4社のヒアリングを行い、調査結果をまとめた。大病院へのアンケートは業界誌でも行われているが、実際の現場ヒアリングはあまり例がないようであった。企業秘密的な部分があり、社名は伏せることで了解を得た。

調査で行ったヒアリングからも「コミュニケーション能力」が現場で求められていることはわかった。どの分野にも言えると思うが、技術・技能と同時にコミュニケーション能力を高める教育が現場から求められている。

②事業により得られた成果

以下の冊子に本事業で得られたすべて知見をまとめた。

◎教育プログラム(カリキュラムおよびシラバス)・調査報告書 30部

◎口腔顎顔面技工テキスト 2000部

◎口腔顎顔面技工実習帳 2000部

③今後の活用

吉田学園医療歯科専門学校では、平成21年度より本事業で開発した教育プログラムと教材を授業で活用する。本事業への協力校および執筆者の所属学校でも、授業への採用を検討してもらっている。また、日本口腔顎顔面技工研究会を通して、本教材の紹介を継続して行い、教材を広く活用していただき、歯科技工士教育の新たな展開に役立ち、ひいては歯科技工士の社会的地位の向上にもつなげていきたい。

④次年度以降における課題・展開

本事業の実施過程で、歯科技工士の社会的地位の向上について、多くの関係者から指摘された。歯科技工士は、その守備範囲が狭いだけでなく、特に患者との対面による医療行為ができないことが大きな原因であるとのこと。精巧な装具を作成する技能を有している歯科技工士の活躍範囲を広げるためには、法的な規制を改訂してだけでなく、歯科技工士も自らその守備範囲を広げるための知識・技術の獲得に積極的に努力し、社会に大きくアピールしていく必要がある。歯科技工の専門学校は、その教育内容に新しい分野の知識・技術を精力的に組み込み、活躍分野の広い歯科技工士の育成に努力することはもちろん、現任の歯科技工士への再教育にも取り組むべきである。吉田学園は、今後、歯科技工士の地位向上に必要な知識・技術の研究と、その教育のための教材づくりを推進していく予定である。

3. 事業の実施に関する項目

①開発

■開発①

「教育プログラム(カリキュラムおよびシラバス)」を開発し、報告書にまとめた。

■開発②

開発①の教育プログラムと連動させながら、学生にわかりやすく、見やすい教材となることを心がけて編集し、「口腔顎顔面技工テキスト」「口腔顎顔面技工実習帳」を開発した。

②調査

4社のヒアリングを行い、調査報告書としてまとめることができた。以下のテーマについて小項目を設けてアンケートを実施した。

1.必要な知識について 2.必要なスキルについて 3.需要について 4.材料について 5.製作者について

③実証講座

【学生対象】

- 1 平成21年1月13日(火)&1月14日(水)9:15~16:35
- 2 場 所 吉田学園医療歯科専門学校
- 3 講 師 佐賀大学医学部附属病院歯科口腔外科 山口能正
- 4 参加者 吉田学園医療歯科専門学校歯科技工学科1年生8名
2年生5名、専任教員3名(以上16名)

5 内容

- ①講義(顎顔面補綴について/海外のエピテーゼ技巧)
- ②眼窩エピテーゼ製作工程のレジンプレーム製作
- ③ワックスエピテーゼの製作
- ④睫毛、眉毛にカールをかける
- ⑤顔面ワックスアップ
- ⑥埋没
- ⑦流蠟
- ⑧ベースシリコーンの填入

6 考察

講義や実習中에서도質問に答えて頂き、非常に分かり易い授業であった。学生達もこの分野に多大なる興味を持ったようである。

はじめて触れる材料などもあり、とまどっていたようであるが、内部着色材などの配合も積極的に行なっていた。

眼球の位置決定、およびワックスアップに少々時間がかかっていたようである。

今回の授業は1・2年生合同で4グループに分けて行い、実習の方法や時間配分、学生にとっての難易度などの検証を行なった。

2日間の実習で、しかもグループ実習となったが、概ね予定通りであり今回作成した実習帳およびシラバスで十分授業を行なえるものと考察できる。



【教員対象】

- 1 日 時 平成21年1月16日(金)9:00~16:00
- 2 場 所 吉田学園医療歯科専門学校
- 3 講 師 日本口腔顎顔面技工研修会 会長 関 三千男
- 4 参加者 8名 ※全国の歯科技工士学校、吉田学園全職員に案内送付
- 5 内容

- ①歯科技工士近接職の動向
- ②口腔顎顔面技工とは
- ③歴史
- ④口腔顔面頸部の疾患
- ⑤口腔顎顔面技工の成り立ち
- ⑥顎義歯について
- ⑦睡眠時無呼吸症候群装置について
- ⑧発音について

6 考察

教本の目次に添って口腔顎顔面技工の基本となると思われる部分(作成教本約24ページ分に相当)について講義をしていただいた。

シラバスの予定では8回分に相当する内容であったが、今回は教員を対象とした講義であるためこの内容を学生に講義するにはやはり8回程度は必要と思われる。

教本はわかりやすい語句で製作されており、学生が理解しやすいものと思われる。

今回の実証講座は他医療職の参加もあり、それぞれの立場においての活発な意見交換がされた。これからの顎顔面技工にはこれこそが重要なことではないかと思われる。

④その他

口腔顎顔面補綴にかかわる歯科技工士の社会的状況等についても会議の中で意見交換ができ、特に資格認定に関しては現状認識を深めることができた。